

## 大村での23年を振り返って～4人の院長との出会い～

長崎医療センター 濱脇正好

はじめに、長崎医療センターに赴任して早いもので23年が過ぎました。

私事ではありますが3月に定年を迎えるにあたりこの23年余りの間に出会った4人の院長との関りを通じて、長崎県医師会のみなさまへまた長崎医療センターのみなさまへ私の思いを伝えたいと思います。思い出話です、気軽にご拝読ください。

まず、私が最初にお世話になったのが、矢野右人名誉院長です。初対面は2000年8月末頃だったでしょうか。長崎大学心臓血管外科江石清行教授とともに当時の国立長崎中央病院を訪ねました。私にとって初めての長崎訪問でした。聞いてはいましたが“長崎県内で小児心臓血管外科の診療を”という強い思いを

感じるとともに責任の重さも痛感しました。また矢野先生の発案で私の紹介用冊子（小児心臓血管外科医長紹介）を作成していただきました。当時40歳になったばかりで今見るとかなり若いですね。

小児心臓外科開設  
小児心臓血管外科医長紹介

小児開胸術(4歳)開心術  
(主任後の第4例)

新生児大動脈離断症開心根治手術後  
(患者の父が撮影した術後写真)

National Nagasaki Medical Center  
国立病院長崎医療センター  
院長 矢野 右人

〒856-8562 長崎県大村市久原2-1001-1  
TEL: 0957-52-3121  
FAX: 0957-54-0292

小児心臓に関連して時期は少し後になりますが、2006年7月29日～30日に長崎市で開催された、第50回九州ブロック学校保健・学校医大会及び2006年度九州学校検診協議会での教育講演の依頼を受けました。矢野先生また次に紹介する米倉先生からの推薦があったと聞いています。「教育

講演・心臓部門：先天性心疾患術後の生活管理について」と題してお話しをさせていただきます。

さて矢野先生で忘れていけないのが、新病院への移転です。2001年9月に旧

病棟から新病棟への移動が実施されました。比較的リスクの低い患者さんから移動が始まり、最後の一人が数日前に私たち心臓血管外科で緊急手術をした 2 か月の乳児症例でした。まだ気管内挿管されたままであり呼吸の補助をしながらの移動であったことを今も記憶しています。実はその後しばらくして偶然、整形外科病棟で母親と 11 歳になったこの子に再会したのですが、話を聞くと元気が良すぎて左腕を骨折し治療中とのことでした。短い期間でしたが矢野先生には知らない土地で私が診療を開始するきっかけだけでなく多くの援助をいただきました。

さて、二人目は米倉正大名誉院長です。10 年という長い間、お世話になりました。話したいことは沢山あるのですが、まずは国際交流からお話しします。最初は南京大学付属鼓楼院病院との学術交流です。2006 年 11 月、3 回目の学術交流会が南京市にて開催されました。私にとっては初めての中国訪問でした。メンバーは（当時の敬称で）、米倉正大院長を団長に、石橋大海臨床研究センター長、中原賢一副院長、産婦人科安日一郎先生、血液内科吉田真一郎先生と私でした。1 日目、長崎空港から上海浦東空港へ、そして空港から現地病院関係者の車で南京市へ移動、当日挨拶を兼ねた懇親会をしていただきました。翌日は南京大学付属鼓楼院病院にて第 3 回学術交流会が開催されました（写真右）。



「小児心臓手術の現状と問題点」の演題を日本語で発表、それを現地スタッフが中国語に同時通訳、スライドは英語と中国語を併用しました。また病院内も案内していただき、当時としては最先端のMRIなどの医療機器には正直びっくりしました。3 日目は孫中山（孫文）の陵墓である中山陵など南京市内観光をした

のち上海まで移動、最終日は上海市内からリニアモーターカーに乗車、時速 400 kmを体感し浦東空港へ、そして長崎に戻りました。ご存じのように長崎と上海は東京よりも近いくらいでフライト自体は快適でしたがやはり中国国内での移動には現地の人もかなり気を使っていたようです、南京市でしたし。

次に北華大学です。実は前述した南京市訪問ののち、米倉先生と石橋先生は吉林省吉林市にある北華大学を新たな学術交流締結のために訪れています。詳細は省きますが、私は数年後にこの吉林市を訪れることとなります。もともと循環器内科於久幸治先生への学会発表依頼だったのですが外科領域もと依頼があり、私が心臓血管外科を代表して発表させていただきました。発表の内容はともかくこの時に於久先生とたいへんな思いをしましたので少しご紹介します。～於久先生との珍道中～ 吉林省吉林市の最寄りの空港は長春市になります。映画ラストエンペラー（清朝最後の皇帝・溥儀）でも有名な土地で観光名所にもなっている大都市です。日本からは中部国際空港からの便もあるのですが私たちが利用したのは、福岡発上海経由の便でした。スムーズであれば比較的一般的なルートなのですが、中国の国内線はなかなかトラブルも多く、私たちもそれに巻き込まれました。上海空港で出発遅延の案内があり、実際かなり待たされることを覚悟していたのですが、何故か私たちの便の案内が比較的早くあり正直ラッキーと感じていました。そして混雑する待合室を横目に見ながら、いざ長春市への飛行機に乗り込み駐機場を出発したまではよかったのですがしばらく空港内を走ったあと停止しました。離陸なのかと安易に思っていたのですがそれから何と 2 時間以上その場で待機させられました。これには同じ飛行機に搭乗していた地元の人もかなり苛立っており携帯電話で大声で会話したり、またかなり問題となる行動も取っていました。私と於久先生の座席は何故か少し離れておりその問題となった搭乗者の席は於久先生のすぐそばでした。空港内ラウンジならともかくさすがに搭乗後に狭い座席で 2 時間以上待機させられ私自身も実際飛ぶのかどうかも不安でした。どうにか出発し、長春市に到着した時にはすでに日は暮れていました。当日吉林市からわざわざ空港まで出迎えがあり、すでに夜遅くになっていましたが歓迎会が開かれ、どうにか宿泊予定のホテルに到着しました。すでに日付も変わっており正直疲労困憊の状況でした。翌日は朝早くから学会が開催予定であり、当日午前中に私たちの発表もあったため用意いただいた部屋はかなり豪華なスイートルームだったのですがベッドで数時間横になっただけでした。発表のあと当日、吉林市から車で長春市へ移動、帰りは

再度、長春→上海→福岡空港でした。帰国後しばらくは、上海でのエピソードは中国だから仕方ないかなと思っていたのですが、それから十数年たった 2023 年 9 月、羽田空港で同様のトラブルに遭遇しました。この日は十和田市で開催された学会の帰りで三沢→羽田→長崎の予定でした。トランジットも 90 分と余裕がありました。当日は午前中から羽田周辺で落雷が頻発しておりそのために欠航や発着遅延が相次いでいました。その情報は得ていたのですが、三沢を 30 分遅れで出発、羽田到着は 20 分遅れで乗り換えにも余裕ありと思いきや到着したものの駐機場へは移動できず、空港内をうろうろすること何と 90 分以上。私も初めての、いや日本では初めての経験でした。すでに長崎便は出発時刻を過ぎていましたが、この便も出発が遅れており何とか間に合いました。そして定刻から 2 時間遅れで長崎へ向けて出発したのですが、ここからまだ続きがあります。事前に空港ロビーでおそらく情報提供はあったのだらうと思いますが、機内放送で“長崎空港閉鎖時間に間に合わなかった場合、羽田空港へ戻ります”と CA からアナウンスがありました。飛行機は長崎空港閉鎖 10 分前に到着、機内ではいたるところで拍手が。今回の長時間待機のアクシデントは中国ではよくある話と高をくくっていたのですがまさか日本でも再度経験し、また空港閉鎖のことも報道等で福岡空港の話題は知っていましたがまさか長崎空港で自分が体験ニアミスになるとは・・・、貴重な体験をさせていただきました。さらにこの文章を書いているときに羽田空港での衝突事故報道があり、リスクマネジメントの大切さとともにいざという時のための準備の重要性を再認識しました。話がかなりずれてしまいました、本筋に戻します。

米倉院長時代の次の話題は業績年報作成に関してです。心臓血管外科医長として赴任した私でしたが、2005 年 11 月から診療情報管理室長の辞令を受けていました（その後診療情報管理士の資格も取得）。当院では毎年各診療部門へのヒアリングがありその都度資料が作成されていたのですが、2004 年に国立病院機構となったこともあり各診療部門の業績を 1 冊の冊子にまとめた、と依頼を受けました。ほぼゼロからのスタートでしたが各部署の協力も得て無事、編集長の役割を踏襲、現在（冊子から CD へ）に至っています。そのほか、米倉院長時代の数多いイベントを箇条書きにしますと

- 電子カルテ導入（2004 年）と更新（2009 年）
- 病院機能評価認定（2005 年 4 月）と更新（2010 年 5 月）
- DPC 運用開始（2006 年 7 月 1 日）

- ドクターヘリ運用開始（2006年12月1日）
- カザフ国立循環器病学・内科学科学研究センターとの学術交流締結（2007年4月）
- 日本輸血細胞治療学会 I&A 認定（2008年3月）
- 医療相談支援センター開設（2008年7月）
- 長崎県DMA T始動（2009年3月20日）と東日本大震災（2011年3月11日）

などなど数えきれないほど多くのことを経験させていただきました。

さて3人目は江崎宏典名誉院長です。やはり10年間お世話になりました。後半は感染対策ばかりでしたがこれに関しては現、八橋弘院長からすでに詳細な報告がされていますので省かせていただきます。ここでは、まず予約入院支援センター設立へ向けての視察のお話をします。このプロジェクトのきっかけは、佐久総合病院西澤延宏先生の講演「佐久総合病院における術前検査センター開設の効果」でした。当院でも早速、外来機能強化プロジェクトチームが立ち上がり、私もメンバーに選ばれました。当時の江崎宏典統括診療部長を団長に、堤圭介脳神経外科部長、私、放射線技師長、副看護部長、救命センター看護師長、企画課長、専門職の以上8名をメンバーとした視察団が生まれ、地方独立行政法人加古川市民病院機構加古川東市民病院の術前検査センターと福井大学医学部附属病院（私は第一期卒業生になります）の術前検査センターを視察する計画が2011年12月に実施されました。当初は佐久総合病院の見学も考えられたのですが、すでに完成された施設の見学よりもここ1-2年で立ち上がった施設を訪問し、準備段階また開設後の問題点などを情報収集したほうが良いのではとの判断で上記2施設になりました。何れの施設でも丁寧に対応していただき、今の予約入院支援センターの礎になったと思います。ひとつ思い出を付け加えると、福井からの帰路、12月としては少し早い雪となりました。小松空港へのリムジンバスを最寄りのバス停で待つ間、吹雪を避ける場所もなく、傍にあった電話ボックス（今では懐かしい景色ですが）の中に女性陣を中心に暖を取ったことでしょうか。

さて江崎院長時代で忘れていけないのが、2016年11月に受審した医科特定共同指導です。これには病院を挙げて対応しました。当時の藤岡ひかる副院長、事務部長からの依頼を受けて、医師診療部門対応の責任者を任されました。私自身過去に経験がなく、長崎大学にて受審の経験があった当時の小児科本村秀樹

先生など何人かの先生にもご協力いただいて大掛かりな準備をしました。シュミレーションを繰り返し実施し、正直私はかなり悪者になったと思います。ただ、大きな問題提議もされず無事終了した時には職員全員がほっとしたのを覚えています。医師からもシュミレーションの時の方が厳しかった、との発言もありました。またその際には医師会の先生にも立ち合いなどご協力をいただきました。改めてお礼申し上げます。後日談ですが、立ち会われた医師会の先生からは“サーベイヤーがかなり褒めていたよ”とお褒めのお言葉もいただきました。

そして 2019 年 1 月から私は緩和チームへ所属することになりました。それから 5 年、緩和チームでの活動を継続しています。この間、新型コロナウイルス感染が大流行し、現在に至っています。

最後は現、八橋弘院長です。2 年ではありますが、いろいろとお世話になりました。八橋先生の印象は一言でいうと職員とのコミュニケーションです。もちろん前述した 3 名の院長も職員思いの、また当院が大好きな先生方でしたが、八橋先生からの情報発信はかなり多いなと思います、あくまで私の印象です。八橋院長との関りの中で、私の最後のお話として少し経営に関わるお話をして文章を閉じたいと思います。

私は前任者のあとを継ぐ形で病院内の診療報酬管理運営委員会のメンバーになりました。また 2014 年 4 月からは診療報酬管理運営部長となり責任も重くなりました。その中で当院の長年の懸案であった、DPC 特定病院群（2 群）への取り組みに参加、現在も維持できています。また機能評価係数の向上、さらに診療報酬改定のたびにその対応と病院職員への周知なども実施してきました。直近では“急性期充実体制加算”の取得です。経営にはかなりプラスになったと思います。一方で新型コロナウイルス感染に伴い全国の医療機関では厳しい経営が続いています。また急性期病院の宿命でもあるのですが、査定減への対応も必要です。まだまだ満足するまでには至っていませんが、医師への周知だけでなく、医事課職員への指導も現在進行形で行っています。幸い、皆様のご協力もあり少しずつ改善には向かっていますが目標には至っていません。これは経営陣だけの問題ではなく、医師も含めた全職員の意識の問題でもあります。常に情報提供をこころがけ、また不要と思われるところでも汗をかいて、悪口をいわれながらも頑張ってきたつもりです。うまく引継ぎができればと今模索中です。

最後までお読みいただき感謝します。この 23 年間余りの時間はあっという間に過ぎた気持ちもありますがなかなか中身の濃い 23 年だったと感じています。

無事定年退職できるのも私のわがままを聞いていただいた 4 人の院長先生をはじめ多くの先生方、スタッフのおかげです、心から感謝します。昨今の働き方改革など医療界には難しい問題が山積していますが長崎県民が安心して過ごせるように医師会の皆様、また長崎医療センターのみなさまにはさらなるご発展を期待しています。私も微力ながらできることがありましたら協力したいと考えております。

謝辞：

実は本文とほぼ同じものを、長崎県医師会報（第 938 号）へ投稿しております。国病久原会会長米倉先生の意向により国病久原会 HP にも寄稿することになりました。本文作成に当たって、長崎医療センター八橋弘院長、田川努臨床研究センター長並びに関係各位のみなさまにお礼を申し上げます。